

保育を必要とする子ども



津 守 真

子どもは生れたときから家庭で親から保育されているのがふつうである。そして幼児の年令になると、幼稚園や保育園で集団生活の中で保育されるようになる。

幼稚園や保育園では、集団生活の中で子どもを保育するのであるが、すべての子どもがように保育を必要としているとは限らない。子どもによって、幼稚園や保育園で保育されなければどうしても正常な発達をとげることができない場合もあるし、また、家庭生活だけでも発達に必要なものがみだされていて、幼稚園や保育園にくることによって、さらに豊富な経験をして、一そう健全な発達をするような場合もある。いずれの場合も保育を必要とすると考えれば、すべての子どもは保育を必要としていると言える。しかし、子どもによって、保育を必要とする程度が異なると言えよう。そして、それによって、保育の方法も異ってくるであろう。

もっとも保育を必要とする子ども

最も保育を必要とする場合は、家庭で親が子どもの必要としている保育をあたえることのできない場合である。このような場合は、ふつう、保育に欠ける子どもと言われている。その極端な例は、子どもの保育にあたる親、とくに母親がいない場合である。母親がいなくても、母親と同じように子どもの養育に専心できる、特定のおとながいればよい。しかし、責任ある特定の養育者がいないときには、子どもの必要としている保育の要求がみたされない。

幼児期には子どもは保育される要求をもっている。保育の要求は、子どもの側から言えば、いろいろの欲求をふくんでいる。食事をとることも、乳児のときにはまったく母親に依存しているのであるし、幼児になれば自分で食事することができるようになるが、親に依存しなければ適切な栄養をとることができない。休息をとる

ことも、外界の危険から身を守ることも、乳幼児期には、親の適切な保護と監督のもとになされることが多い。このような衣食住に関する子どもの身体的物質的なものについての欲求は、これが満たされなければ子どもは生存することもできない。保育のみたさなければならぬ最低の要求である。そしてこれらは、ふつうには家庭で満たされているものである。

子どもは、身体的物質的なものに関する欲求が満たされるだけでは十分ではない。乳児は、乳をのむときには母親に抱かれ、胸によりそって、安心して乳をのむことができるのであり、母親がそばにいるとわかっているから、安心して眠ることができるのである。ただ身体的な必要が満たされるだけでは、子どもの精神も身体も健全な発達をとげることはできない。このことは、最近、多くの研究によって実証されつつある。乳児期や幼児の初期に、子どもが母親からはなされると、たとえ衛生設備が完備し、栄養が十分にあたえられても、子どもの發育、發達がおくれ、あるいは落着かない行動やくせがあらわれて、情緒的に不安定な状態になり、あるいはまた、周囲の事物に関心や興味を失って、無感動な子どもになる。すぐれた設備をもった乳児院などの場合、子どもは家庭にいるときよりも、よりよい物質的環境をあたえられたとしても、今まで親切に養育されていた母親から離れると、健全な發達が阻害されるのであるから、

子どもは母親の愛情と個人的な世話を要求していると言える。

家庭で母親から愛情ある保育をうけている場合には、子どもの保育の要求は満たされているが、いろいろな事情でそれができない場合がある。母親が死亡した場合、病気のとき、離別して家にいない場合など、子どもは誰か他の人に世話されねばならない。祖母などのように母親の代りになってくれる人があればよい。それがない場合には、乳児院や保育園につれてこられる。そこで、集団保育の場合において、このような子どもを、どのように保育したらよいかわということが問題になる。

そこですでに明らかのように、身体面・栄養面の考慮だけでは十分でない。この子どもたちの要求しているものは母親であり、特定の個人によって、愛情ある世話をうけることである。集団保育は、まず子どもの個人的要求をみたさなければならないのである。このことを一そう明瞭に示してくれるのは、いくつかの乳児院の実験である。同じように衛生設備が整い、すぐれた栄養があたえられている二つの乳児院で、一方はふつうの乳児院のように、十五人の子どもに一人くらいの割で看護婦を置いて世話し、他方は、五人に一人くらいの割でおとなを置いて、できるだけ個人的に接触し、抱いたりあやしたり、一しょに遊んだりする。そしてできるだけ特定のおとながいつも同じ子どもを世話するようにする。そうすると、後者

のように、子どもを個人的に世話する方が、子どもの発達は身体的にも精神的にもずっとすぐれるのである。

母親がまったくいないという場合は、むしろ特殊な例であろう。

しかし、母親がいても、十分に子どもの世話をすることができない場合は多い。母親が職をもって外で勤めていて、朝晩だけしかない場合、母親が家庭にいても、店の商売などできわめて忙がしい場合など、親は子どもと接触する時間が少なく、子どもは無視されがちなことが多い。もちろん、このような場合は、母親がいるのであるから、母親がいない場合とは質的に異るとも言える。また、母親の態度や性格によって、子どもの要求が相当に満たされる場合もある。しかも、母親が職業をもっている場合は、子どもは家にもいない、発達に必要な経験がえられないから、集団保育に出されることも多いし、この方がよい。そして、そのような場合に、その子どもたちの必要としている保育の第一段階は、子どもと個人的に接触して、母親によって満たされていない精神的満足にあたえることであるということができよう。

母親が家庭にいて、教養もある場合でも、子どもは母親に世話されるという要求が満足されていないことがある。それは、母親が子どもを拒否的に扱っている場合などである。母親が家庭外のことにより多くの関心をもち、母親としての役割に満足しないで、むしろ

それを嫌悪している場合など、母親は子どもにあまり手をかけず、子どものことをかまわない。このような子どもが、幼稚園で欲していることの最初のは、おとなから個人的に目をかけられることであり、その要求は満たされなければならない。

その要求が満たされたときには、子どもは情緒的にも、知的にも、社会的にも健全な発達をしてゆくことができる。私ども(註一)は、保育園に入園したての、まだ十分に保育をうけていない子どもと、保育園で相当の期間保育された子どもとを、一組ずつ対をつくって、知的、社会的、情緒的な面を、個人検査や保母の評価によって調査してみたが、その結果は、保育された子どもの方がすぐれているのを見出すことができた。保育に欠けた子どもを保育することとは、子どもの発達にきわめて重要なことと言える。

以上のべた子どもたちは、もっとも保育を必要とする子どもであり、それはいわば集団保育以前の保育を必要としているものであった。このような意味で保育に欠けた状態がみられた後、必要とする保育はどのようなものであろうか。次の段階は、集団生活の経験のない場合、または、集団生活に適應できない場合である。

集団生活の経験のない場合

二、三才になると、子どもは、おとなを相手にするよりも、子ども同士で遊ぶことをたのしむようになる。この段階で友人と遊ぶこ

とを経験できない子どもは、子ども同志で遊ぶ機会をつくらなければ、子どもの欲求も満足されないし、社会的に交わる技術を身につけることもできない。そこで、友人と交わる機会のない子どもは保育を必要とする子どもである。また、たとえ集団生活を経験しても、集団生活にうまく適応できない子どもは、集団保育を必要とする子どもである。

新入園児の中には、なかなか集団生活に馴れない子どもがある。母親や付添からはなれない子ども、先生にくっついてばかりいる子ども、グループにうまく入れない子ども、友だちと遊ぶ技術を知らず、ただ乱暴する子どもなどは、新入園児の中にごく一般的にみることのできる子どもである。そのいろいろの例について本誌の五十巻十号に(巻末)記されているので参照されたいが、このような場合、保育の初期の段階では、保育者と子どもとの個人的な関係が重要である。子どもについてよく知り、不安な気持をうけいれて、安定感と親近感をもたせてゆくことによって、集団生活に適応させてゆくことができる。

保育に欠けた状態がみられた場合

子どもが家庭において、この保育の必要をみだされ、集団生活の経験をして、集団にも一応の適応をした後には、保育はもはや不必要になるであろうか。私は決してそうは思わない。ここで保育の最

初の段階が終るのであって、その後には今度は一そう建設的な保育の段階がくるのである。

この段階では、子どもの発達しつつある諸能力に適切な刺激をあたえ、指導することによって、満足をあたえてゆくことが重要である。社会的な面でも、知的でも、その発達段階に応じて、そのときにもっている能力に挑むような材料と指導をあたえることにより、十分な発達がおこなわれる。

たとえば集団の中に想わずに入ってゆけるようになった子どもは、次には友人と次第により高度の交渉をもつことが必要であるし、また友人同志と協力して建設的に活動することが必要である。単純な協力関係から、次第により複雑な協力関係にまでいろいろの段階がある。保育は一つの段階から、さらに次の段階へと子どもを導いてゆくの助けるのである。この段階ではさらに多くの面について検討せねばならないが、ここではこれ以上ふれないことにしよう。

保育の諸段階に関する考察

以上、保育の必要に関して、いくつかの段階にわけて考察したが、右にのべたように、保育を必要とする程度には段階がある。図に示すように、第一の段階は、家庭の保育がみだされることである。子どもの身体的生存に必要な物質的欠乏のあるときや、養育に

関する精神的必要のみたされない場合には、それがみたされること
がまず重要であり、それは集団の中でも、個人的な配慮すること
によってなされる。また親の生活の中の種々の原因から、親が誤っ
た育児態度をもっている場合があり、その場合には、それぞれに
応じて集団生活の指導を考えねばならない。いずれの場合、行動と
しては不適応な行動に結果するであろう。

家庭保育がみたされても、集団生活の経験のない場合や、集団生
活に不適応な場合には、それは子どもの不適応な行動としてあらわ

III	発達段階に 応じた教育	適切な指導			みたされている
II	集団生活の 経験	不適応な行動		集団生活に 不適応	
		不明の原因	集団生活の 経験がない		
I	家庭の保育	個人的養育の 必要	適切な指導	みたされている	みたされている
		養育的要求の欠乏	誤った育児態度		
			不明の原因		

保育を必要とする段階斜線はみたされている状況を示す

れ、適切な指導がなされねばならぬ。不適応な行動は、なおその他
に、家庭あるいは集団生活においてその他の不明な原因によって生
ずるものがある。

以上の段階を経ると、次には発達段階に応じた教育によって、一
そう建設的な保育の段階へと移る。それぞれの段階のどこに位置す
るかによって、幼稚園や保育園で、どのような指導上の配慮を必要
とするかは違ってくるのである。

注1 牛島・津守・稲毛・横張 保育に欠けた子どもの保育効果

厚生省児童局監修 保育所のことどもたち 昭和三十三年

注2 幼稚園になれない子どもの研究

幼児の教育 五十五巻十号 六一十六頁 昭和三十一年

このたびの台風22号は各地に大きな被害を与
え、ことに伊豆地方におきましては、その惨状想
像を絶するものがございませう、ここに誌面を通
して御見舞申上げます。

日本幼稚園協会